

世界都市間競争において躍進する都市・韓国ソウル

一般財団法人 森記念財団 都市戦略研究所

研究員 大和則夫



旧ソウル市庁舎(手前)と現市庁舎(後方)

はじめに

去る8月11日～12日、森記念財団理事の市川宏雄明治大学専門職大学院院長が、ソウル市庁からの招待を受け、「GPCI からみたソウルの競争力と政策課題」、「東京の未来戦略」というテーマで2日間に渡る講演会を行った。また、講演会終了後にはソウル市庁関係者の案内による市内視察ツアーも行われ、アジアを代表するグローバル都市・ソウルで最近話題のスポットを見て回った。そこで、講演会やその後の市内視察の様子を報告する。

1. ソウルの基礎情報

ソウル市の面積は605k m²であり、東京23区(622k m²)と比べると、東京の方が若干大きい(図1)。一方で、人口はソウル市が約1,000万人に対し、東京23区は約900万人のため、ソウルの方が人口密度が高いことが分かる。ここで、人口密度の地理的分布を見てみると、図2の通り、ソウルは人口密度が高いエリアが中心エリアの周辺に存在していることが分かる。

(図 1) City Profile

■ソウル

人口: 10,442 人(2012 年)

面積: 605 km²

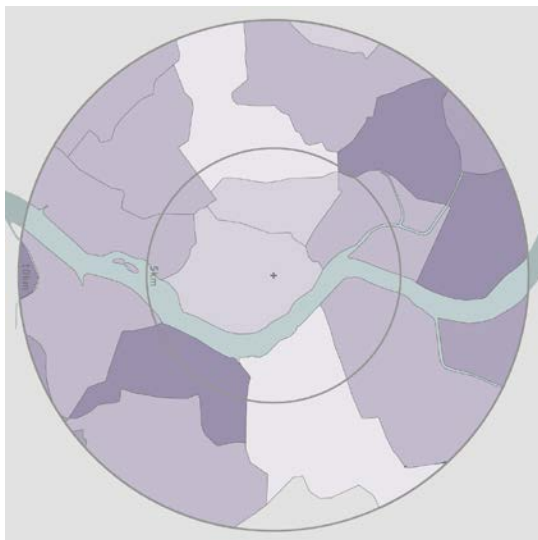
■東京 23 区(参考)

人口: 9,002 人(2,013 年)

面積: 622 km²



(図 2) Population Density, GPIC1



ソウル



東京

2. 空港から市内へのアクセス

羽田空港を出発してから約 2 時間 30 分、金浦国際空港に到着した。ソウルの国際線旅客数は年間約 3,800 万人なので、約 3,300 万人の東京よりも上回っている。空港から市内へは車で移動したが、ソウル中心部に立地しているホテルまでの所要時間は約 45 分で、若干長く感じられたが、帰国時に羽田空港から東京駅までリムジンバスで約 40 分（渋滞なし）であったことを考えると空港アクセスには大差はないようだ。一方で東京と比べるとソウルの車道の幅員はとても広く、そこにバスやタクシーが非常に多く走っていることからソウルはアメリカ型の車中心の社会であることがすぐに理解できた。

車中から見える川と橋と建築物から構成される景観は、私の好きな都市景観の一つであるが、ソウル中心部を流れる漢江（ハンガン）の対岸に見える汝矣島（ヨイド）の超高

層ビル群と周辺のマンション群で構成された景観を見たとき、資本主義経済の象徴ともいえるニューヨークの都市景観や、階級社会や時の権力者が作りだした荘厳な建造物を有するロンドンやパリで見た都市景観とも異なり、個人的には資本主義・先進国・発展途上国・欧米・アジアの juxtaposition（並置）のような印象を覚えた。



車社会ソウルの特徴ともいえる広幅員の道路

3. 講演

初日は「GPCI からみたソウルの競争力と政策課題」と題し、計 2 時間に渡り市川教授が講演と質疑応答を行った。出席者は政策企画官（局長）をはじめとして、投資勧誘、交通政策、交通運営、雇用政策、経済政策、企画、保健政策、環境、エネルギーなどの各課長、ソウル大学、ソウル研究院の方々など総勢約 30 名であった。講演では、GPCI の視点からみたソウルの強み・弱みについて話すとともに、そこから導きだされる政策課題は何かということ由市川教授が話をした。その後の質疑応答は非常に盛り上がり、GPCI に関するテーマに留まらず、ソウルでも議論となっている首都機能移転の問題や、日韓両国が抱えている少子高齢化社会の問題、特区や規制緩和に関すること、2020 年東京オリンピックに関することなど、多岐にわたるテーマでディスカッションが行われ非常にいい討論会になったと感じた。



ソウル市庁舎内の会議室にて講演を実施

翌日は、漢江の南側の閑静な小高い丘の中に立地しているソウル研究院主催の講演会で、「東京の未来戦略」と題し、約 25 名の研究者の方々を対象に講演を行った。東京のコアエリアの変遷から始まり、2020 年東京オリンピック、リニアモーターカーが日本の広域経済圏に変化をもたらす可能性などについて話した後、「東京未来シナリオ 2035（森記念財団都市戦略研究所）」に関する説明を行った。その後の質疑応答では、バブル経済崩壊後に日本が取った政策や国土の均衡発展に関する議論などを行った。



自然豊かで閑静な研究環境のソウル研究院の建物入口

4. 視察ツアー

初日の講演後は、ソウル市庁の方々の案内で、2013年に新たに建てられたソウル新市庁舎およびソウル図書館(旧市庁舎)、2014年3月に開業したザハ・ハディド氏設計の東大門デザインプラザ(DDP)の視察を行った。あいにく月曜日は多くの公共施設が休館日のため図書館やDDPの展示室は休館日であったが、特別に開放して頂き、内部見学をさせて頂いた。

旧ソウル市庁舎は 日本統治時代の1926年、京城府庁舎として建築され、終戦後はソウル市庁舎としてずっと使われてきた。新市庁舎は2012年に竣工し、中に入ると2013年にギネスブックに登録された世界最大規模の垂直緑化が人々を迎えてくれる。

「東大門(トンデムン)デザインプラザ(DDP)」は、かつて球場やサッカー競技場などスタジアムがあった東大門運動場の跡地に、約4年8ヶ月の歳月と約4,000億ウォン(約400億円)の費用が投じられ2014年3月に開業した。DDPに先立って2009年にオープンした隣接の「東大門歴史文化公園(トンデムンヨッサムナコンウォン)」とともに、アート・デザインに触れられる観光名所としてソウルが誇る新たなランドマークである。DDPの設計は2020年東京オリンピックのメインスタジアムと同じザハ・ハディド氏であるが、その外観は極めてユニークで、水平と垂直の面から構成される通常の建物とは大きく異なり、ほとんど全てが曲面で構成されている。



重厚感のある旧市庁舎内部のかつての市庁席



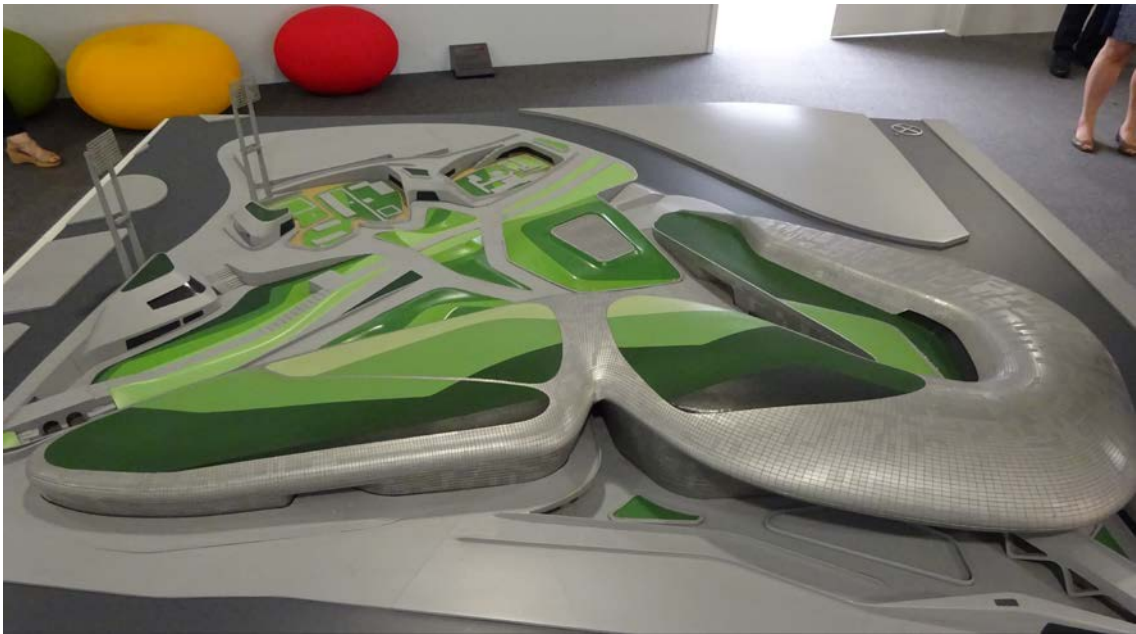
全面ガラス張りと曲面が特徴的な新市庁舎の建物入口



旧市庁舎の背後に迫りくる新市庁舎



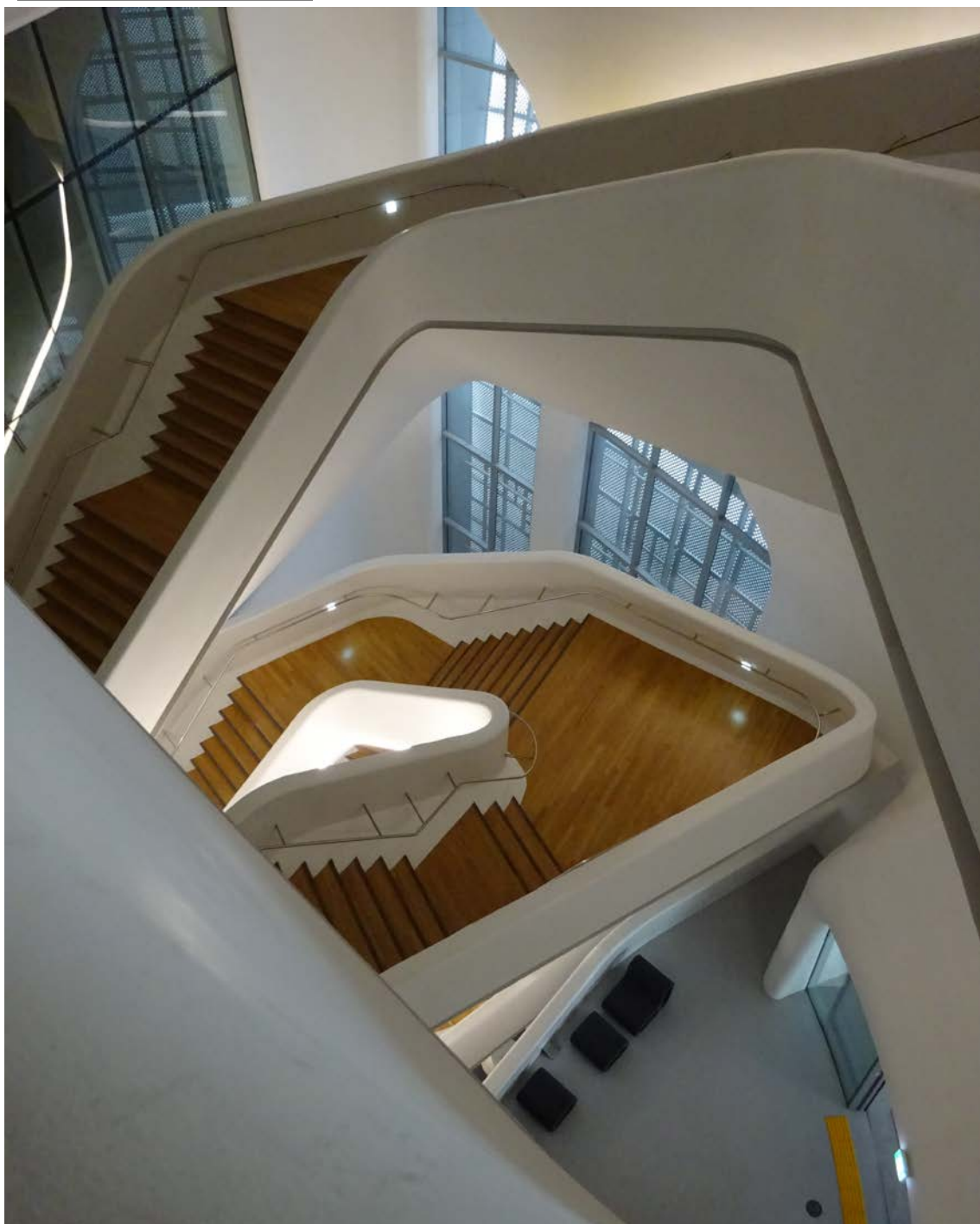
ギネスブックに登録された世界最大規模の垂直緑化



特異な建物形状であることが一目瞭然の DDP の建物模型



ほぼ全てが曲面で構成された DDP の外観



特徴的なデザインの DDP 内部の階段

講演会を無事終えて

今回、市川教授の講演会実施にあたり事務局業務を担当させて頂いたが、国境を越えたやりとりの場合、文化や慣習、国民性の違いによってミスコミュニケーションや心理的ストレスが生じる可能性もあるかと思うが、今回のケースではそのようなストレスを全く感じることなく業務遂行できた。これもひとえに先方の担当者の仕事ぶりに負うところが大きかったと思う。国籍が異なっても、いや異なればこそ、学ぶべき点があれば素直にそれを学んで行きたいと思う。